

「戦争の実相を語り継ぐこと

そして、運動の継続で恒久平和を実現すること」を誓い合って

2018年6月23日、沖縄は73回目の「慰霊の日」を迎えた。この日沖縄は、梅雨明けが宣言されたばかりで焼けつくような厳しい日差しが差し込んでいました。

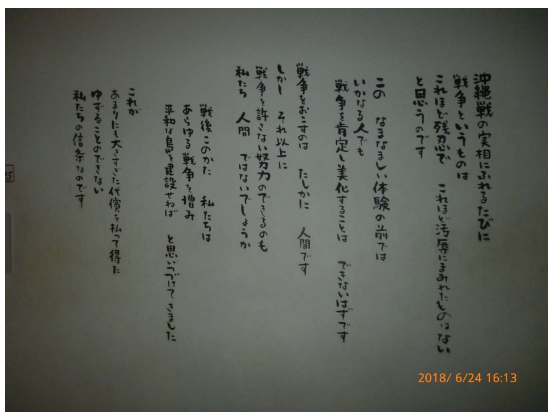
あの日あの時
今と何も変わらない日常をみんな一生懸命に生きていた
寝食を共にする楽しい家族がいた
それぞれの将来を語り合う友達がいた
将来を誓い合った恋人がいた
みんな、それぞれの未来を思い描きながら
そんな日が必ず来ると信じて生きていた
そんな一人ひとりの命が奪われた

翁長沖縄県知事は、沖縄は、「沖縄戦」という悲惨な体験から戦争の愚かさ、命の尊さという教訓を学び、平和を希求する「沖縄のこころ」を大事にして、今日まで復興と発展の道を力強く歩んできたことを力説されました。そして、戦後実に73年を経た現在においても、日本の国土面積の約0.6%にすぎないこの沖縄に、米軍専用施設面積の約70.3%が存在し続けていることのおかしさを指摘されました。

また、「民意を顧みず工事が進められている辺野古新基地建設については、沖縄の基地負担軽減に逆行しているばかりではなく、アジアの緊張緩和の流れにも逆行していると言わざるを得ず、全く容認できるものではありません。『辺野古に新基地を造らせない』という私の決意は県民とともにあり、これからもみじんも揺らぐことはありません。」と訴えられました。

この迫力のある「魂」のこもった平和宣言は、一人ひとりの心の一番深いところでガッチリとつなげるものとなりました。

一方、もう一人の方は、書いてもらった原稿を上滑りながら、読むことで終わりました。



今年も青年委員会から5人の仲間が、ピースガイドとして平和行動in沖縄に参加してくれました。Aコース【米軍基地コース】の担当として、辺野古 → 嘉手納基地 → チビチリガマ → 嘉数高台（普天間基地）をガイドしてくれました。

当時の連合沖縄の事務局長の「沖縄の心を広げたい」「沖縄の青年に平和への思いに刺激を与えたい」などの考えと連合大分の次第を背負う「大分の青年を育てる」必要性が一致し、構成組織の理解の上6年目の取り組みとなりました。

この取り組みは、1つの「入り口」である。そして、「点」であり、「一滴」であり、「灯」であり、「種」である。燎原に広がる火もはじめは小さな灯、固い石を穿つのも一滴の雨だれ、であることから、私たちは、この「点」を大事にしなければなりません。そのためにも、組織として、大同団結してど真ん中の道を進みたいと思います。



▲ 2018平和オキナワ集会



▲ 平和行動 in 沖縄 ピースフィールドワーク

最後に、沖縄の米軍基地問題は、日本全体の安全保障の問題であり、沖縄の基地の現状や日米安全保障体制の在り方を通して、国民一人ひとりに投げかけられている問題です。恒久平和を希求し、未来を担う子や孫が心穏やかに笑顔で暮らせるためにも、私たちは、答えを出さなければなりません。